

第 35 回国際軍事史学会大会発表論文

日本におけるナポレオンの人気と理解

立 川 京 一

【要約】

日本人以外では、日本において最も人気がある軍人と思われるナポレオンが、江戸時代末期に日本人の間で知られるようになった経緯、現存する陸軍大学校の講授録におけるナポレオンとその戦史に関する記述、陸軍大学校で欧州古戦史を講じたこともある石原莞爾のナポレオン理解を分析材料として、日本におけるナポレオンの人気と理解について検討した。

はじめに

一般に、ナポレオンは日本においても、たいへん人気のある歴史上の人物である。日本人以外の、しかも、軍人の中では、おそらく一番人気があるのではなかろうか。19 世紀前半から 21 世紀初頭の今日に至るまで、ナポレオンに関する文献は、翻訳や子供向けの伝記を含めて、数えきれないほど出版されている。そうした人気の理由は何なのであろうか。日本の歴史上、軍人（武将）で人気のある人物といえば、源義経、織田信長、豊臣秀吉といった名前が挙がるであろう。彼らとナポレオンとの間に、共通点があるのであろうか。

旧日本陸軍において、ナポレオンはどのように理解されていたのであろうか。陸軍士官学校、陸軍大学校等の戦史の講義で、ナポレオンとその戦争について講じられている。本発表では、そうした旧日本陸軍が将校育成教育を行っていた学校の戦史の講授録をもとに、ナポレオンがどのように教えられていたのかについて論じる。

ナポレオンについて丹念に研究した旧日本陸軍の軍人の一人に、石原莞爾がいる。石原は関東軍作戦主任参謀時代に満州事変を引き起こしたり、また、参謀本部第二課（作戦課）長として国防方針の改定に携わったりするなど、一時期、旧陸軍内で影響力を發揮していた。また、陸軍大学校で欧州古戦史を講じたこともある。本発表では、そうした石原の独自の研究に基づくナポレオン理解についても論じる。

1 日本におけるナポレオンの受容

ナポレオンが日本人に明確に認識されたのは、1813年のことである。それは、蝦夷地（現在の北海道）の松前奉行所に収監されていたロシア海軍少佐ゴロウニンからの情報であった。ゴロウニンは、ヨーロッパの国で唯一、日本と交易を行っていたオランダに関する情報を日本側に明かす中で、ナポレオンに言及したのである¹。通常、こうした国際情勢にまつわる情報は、長崎の出島にあったオランダ商館の商館長が幕府に報告する形がとられていた（「オランダ風説書」）のであるが、ナポレオンに関する情報はオランダにとって不利益となるものであったため、意図的に日本側に伝えていなかったようである。

このように、ナポレオンについては、まず、ごく一部の幕府の関係者にその情報をもたらされた。その後、ナポレオンの名は、次第に広く知られるようになる。そこには、詩人であり歴史家でもあった頼山陽が創作した漢詩による影響があったという。頼山陽は1818年に長崎を訪れた際、ナポレオンのロシア遠征に軍医として従軍した経験を持つオランダ人医師から、ナポレオンとロシア遠征についての話を聞き、その話をもとに漢詩を詠んだ（「仏郎王歌」）。これによって、ナポレオンが広く世に知られるようになったのである²。

1826年、幕府の役人（天文方書物奉行）であった高橋景保は、オランダ商館長スチュレルからナポレオン情報を聞き出し、ナポレオンの生涯をまとめた（「丙戌異聞」）。スチュレルはナポレオン戦争に参戦したことのある現役の陸軍大佐であった。また、高橋は部下とともに、ワーテルロー戦記（「別埒阿利安戦記」）を訳述している³。当時、日本でナポレオン研究の第一人者と目されていたのは、蘭学者であり医師でもあり、また、幕府の役人（天文方書和解御用）でもあった小関三英である。小関は1829年に、ナポレオンの略伝（「泰西近年之軍記」）を和訳、1832年には、リンデン著『ブオナパルテの生涯』（*Joanne van der Linden, Leven van Buonaparte* [Amsterdam, 1803]）の訳述に着手したが、未完に終わっている。それは1857年に松岡与権の手によって完成され、刊行されることになる（「那波列翁伝初編」）⁴。なお、同書刊行の3年前（1854年）に、別のナポレオンの伝記が翻訳、刊行されている（「仏蘭西偽帝那波列翁一代記」）。これが、日本において初めて刊行されたナポレオンの伝記である。しかし、その原著者、原題、訳者、発行所などは不明である⁵。

¹ 岩下哲典『江戸のナポレオン伝説－西洋英雄伝はどう読まれたか－』（中央公論新社、1999年）62-64ページ。

² 同上、69ページ。

³ 同上、82ページ。

⁴ 同上、90-92、142、157ページ。

⁵ 同上、117ページ。

松岡は、日本が開国を余儀なくされた 1850 年代にナポレオンの伝記を刊行する目的について、「ナポレオンの用兵、軍制、戦争における外交術について詳細を知るための好書として出版すること」と述べている。また、松岡は「現在のヨーロッパの強大化は、ナポレオンの兵学がその重要な原因である」と認識していた⁶。なお、1867 年にはナポレオンの兵法についてナポレオン自身の言葉によって書かれた本（「那破倫兵法」〔Napoleon, trans. by George C. D'Aguilar, *The Officer's Manual: Military Maxims of Napoleon* (Dublin: R. Milliken & Son, 1831)〕が、明治時代に作家、ジャーナリストとして活躍する福地源一郎によって翻訳、刊行されている。国内外において軍事的緊張が高まる中、実用的な軍事的知識が必要とされるようになったと思われる⁷。

幕末から明治にかけて活躍した何人かの日本人も、ナポレオンの影響を受けている。例えば、佐久間象山や吉田松陰は自らをナポレオンと同一視して志士の活動の源とし、ナポレオンによって自分たちの行動を正当化しようとし、あるいは、ナポレオンのような人物が日本にも現れることを期待したとも言える。また、西郷隆盛は尊敬する人物の一人として、ナポレオンを挙げている。最後の将軍となった徳川慶喜もナポレオンにあこがれた一人であったと思われる⁸。

2 旧日本陸軍の戦史教育におけるナポレオンの取扱い

旧日本陸軍には、将校を育成するための教育の場として、陸軍士官学校、陸軍大学校等があったが、ナポレオンについては、主として陸軍大学校の戦史の講義で教えられていたようである。現在、ナポレオンを内容に含む戦史の講授録、数冊が残っている。それらによって、陸軍大学校でナポレオンがどのように教えられたのかについて、いくぶんは知ることができる。

陸軍大学校の戦史の講義でナポレオンを内容に含むものには、ナポレオンに焦点を絞って講じるパターン（ナポレオン戦史）と、主として 18 世紀以降、第一次世界大戦までのヨーロッパにおける戦史の中でナポレオンを取り上げるパターン（欧州古戦史）が代表的である。そのほかに、ヨーロッパと日本の戦史をあわせて講じるパターン（戦史、戦争史）もあった。現存する講授録では、ナポレオン戦史の方は古くは 1907 年及び 1916 年に印刷されたものが残っており、1930 年代にまとめられたものも残っている。一方、欧州古戦史、

⁶ 同上、165-167 ページ。

⁷ 同上、131、133 ページ。

⁸ 同上、ii-vii、127-131、138-139 ページ。志垣嘉夫「獄中からの『自由』に馳せる思い—吉田松陰とナポレオン—」志垣嘉夫編『ナポレオン戦争—戦争の天才児・その戦略と生涯—』世界の戦争 7（講談社、1984 年）173 ページ。

戦史、戦争史等の方は1918年以降のものしか残っていない。欧州古戦史、戦史、戦争史等において、ナポレオンに割かれている紙幅や個々の戦闘の取り上げ方は、講授録によって異なる。

1907年のナポレオン戦史講授録は、1796年、1797年及び1800年のイタリア戦役のみをその内容としている。ナポレオン戦争初期のイタリア戦役のみを取り上げる理由については、それらがナポレオンが天賦の英傑であることを世界に紹介したものであって、ナポレオンがその後、皇帝となる基礎を築いた戦役であり、戦略の妙味もこれらの戦役において大いに発展したからであると述べられている⁹。一方、1916年のナポレオン戦史講授録は、1796年のイタリア戦役から1812年のロシア遠征までの間にナポレオンが指揮を執った11の主要な戦役を取り上げている。同講授録は、ナポレオンは常に奇抜と冒険とを以って大勝を博したとの認識を示しているが、同時に、ナポレオンの奇抜さを模倣することによってかえって自ら危険に陥らないよう戒めている¹⁰。

1918年の戦史講授録は、ポーア戦争、日露戦争、フリードリッヒ大王の戦争、普墺戦争、普仏戦争とあわせて、ナポレオン戦争を取り上げ、ナポレオン戦争におけるいくつかの戦闘を遭遇戦と追撃の例として述べている。遭遇戦の例として述べられているのは、大ゲルシエンとモンミレーユの会戦が中心で、ほかにアウエルシュテット、カツバッハ等の会戦についても述べられている。追撃の例として言及されているのは、イエナ、カツバッハ、ライプチヒ、ハーナウ、ラオン、ワーテルロー等の会戦及び1812年のロシア遠征である¹¹。

欧州古戦史の講授録は何種類か現存しているが、いずれも昭和期に入ってからのものである。講義が行われた年代が最も古いものは、1927年から翌年にかけて陸軍大学校で講じられた石原莞爾によるものである（ただし、講授録の完成は1934年である）。石原のナポレオン理解に関しては、のちにまとめて述べるので、ここでは講授録の構成のみに言及する。石原の講授録ではナポレオンのほかに、フリードリッヒ大王、大モルトケ、第一次世界大戦、さらには日本の国防が取り上げられているが、ナポレオンに全体の7割以上という圧倒的な紙幅が割かれている¹²。石原はナポレオンを中心に欧州古戦史を講じたのである。その内容は戦争指導の観点から、1796年のイタリア戦役から1815年のワーテルローの戦いまでの主要な戦役を網羅的に講じているが、それにとどまらず、英国に対する大陸封鎖を取り上げているのは特徴的である。

⁹ 蠣崎富三郎講述、陸軍大学校御編纂『奈破翁第一世戦史』（兵林館、1907年）1ページ。

¹⁰ 梅崎延太郎講述『奈翁戦史講授録』（陸軍大学校将校集会所、1916年）652ページ。

¹¹ 筒井正雄講述『戦史講授録』（全2巻）（陸軍大学校将校集会所、1918年）。

¹² 石原莞爾「欧州古戦史講義」角田順編『石原莞爾資料—戦争史論—』明治百年叢書（原書房、1968年）。

1930年代に入ってから欧州古戦史の担当者による講授録も、石原によるものと同様、ナポレオンに最も多くの紙幅が割かれ、主要な戦役を網羅的に講じているが、観点はより用兵中心になっている¹³。また、1934年から翌年にかけて欧州古戦史の講義のまとめとして、「欧州古戦史教訓」が講じられたようである。その目的は、ヨーロッパの古戦史、中でもフリードリヒ大王とナポレオンの戦勝の要因と将帥としての修養に関する教訓を学ぶというものである。ナポレオンの戦勝の要因については、主として統帥能力が敵に優り、軍隊も敵と比べて精鋭であったことであるが、敵の弱点を研究し、戦場でそれを見抜き、巧みに攻撃したと述べている。そこには天才的なひらめきもあったが、ナポレオンは鍛錬を怠っておらず、戦争を始めるにあたっては過去の経験を研究し、また、人員を派遣して戦場を偵察させるなどして情報収集に努めていたというように、修養に多くを負っている点が強調されている。一方、敗戦については、体力の衰え、独裁専制ゆえに部下を育成しえなかったこと、戦争目的が不明確であったことなどを要因として挙げている。

第二次世界大戦開戦後の講授録でナポレオンを取り上げているものとしては、「戦争史講授録」と「欧州戦史（戦争指導）講授録」が残っている¹⁴。いずれも、戦争指導を中心的観点としている。前者は第2学年が対象で、同講授録はフリードリヒ大王の戦争から第一次世界大戦までのヨーロッパの戦争と日清戦争及び日露戦争を主たる内容としている。日清戦争と日露戦争に割かれている紙幅は全体の2割弱で、フリードリヒ大王を含めてプロシア及びドイツに関する記述が、残りの大半を占めている。それに押されるようにして、ナポレオンに関する記述は激減し、全体の3.5パーセントにすぎない。しかも、個々の戦闘に関する説明は見られない。後者は第3学年が対象で、その内容は前者の内容から日清戦争と日露戦争が欠けているが、フリードリヒ大王の戦争から第一次世界大戦までのヨーロッパの戦争については、まったく同じ記述である。

3 石原莞爾のナポレオン理解

石原莞爾は昭和期の旧日本陸軍において、ナポレオンを本格的に研究した数少ない将校の一人である。石原は1922年から1925年までのドイツ滞在中にナポレオンやフリードリヒ大王に関するドイツ語とフランス語の図書を収集し、帰国後、陸軍大学校で教官とし

¹³ 中沢三夫「欧州古戦史講授録」年代記載なし、防衛省防衛研究所図書館蔵。この時期の講授録として、「ナポレオン用兵講義」（1932年）、あるいは「ナポレオン戦史講義」（1936年）という表題のものが現存している。ただし、これらの2つの講授録は1930年から1932年にかけて欧州古戦史を担当した者がまとめているため、いずれも内容は類似している（中沢三夫「ナポレオン用兵講義」1932年、防衛省防衛研究所図書館蔵。同「ナポレオン戦史講義」1936年、防衛省防衛研究所図書館蔵）。

¹⁴ 四手井綱正「戦争史講授録」1941年、防衛省防衛研究所図書館蔵。同「欧州戦史（戦争指導）講授録」1941年、防衛省防衛研究所図書館蔵。

て欧州古戦史を講じる傍ら、ナポレオンの研究に勤しんだ。そして、その研究成果はのちに石原が世に問うことになる「戦争史大観」や「最終戦争論」といった論考に反映される¹⁵。

石原のナポレオン研究の特色については、次のような見方がある。

- ① プロシアのフリードリッヒ大王の戦史とナポレオンの戦史を比較研究し、ナポレオンの決戦殲滅戦略をフリードリッヒ大王の持久消耗戦略と対比する形で、人類の戦争史全体の中で体系化し、それを「戦争史大観」及び「最終戦争論」として発展結実させた。
- ② 敗者としてのドイツ側の立場と文献により、ナポレオン戦史を、より実戦的に研究した。
- ③ とくにナポレオンの対英戦争を政戦略の広い視点から、精しく研究した¹⁶。

石原がナポレオンについて最も評価している点は、時代の変化を看破し、殲滅戦略を活用して決戦戦争を指導して、連戦連勝の成功を収めたことである¹⁷。また、石原はフランス革命による社会制度の変化が軍事上の革命をもたらした直接の原因であるとしつつ¹⁸、国民的軍隊、縦隊戦術、徴発給養といった革命によって生じた要素から新戦略を創造するにはナポレオンの天才的頭脳を必要としたと評価している¹⁹。さらに、石原はナポレオンの対英戦争を持久戦争と位置づけ、日本が米国を相手に戦争する場合の教訓とすべきであるとの認識を示し²⁰、かつ、日中間の紛争については、すでにそれが始まってからのことではあるが、ナポレオンのスペインやロシアに対する戦争における失敗の轍を踏むことになるのではないかと、警鐘を発している²¹。

おわりに

冒頭で述べたように、ナポレオンは日本においても、たいへん人気のある歴史上の人物であり、日本人以外の、しかも、軍人の中では、おそらく一番人気があると思われる。ナ

¹⁵ 石原莞爾『最終戦争論・戦争史大観』（中央公論社、1993年）。

¹⁶ 前川清『ドゴールとナポレオン—その政戦略・リーダーシップ・能力開発の研究—』（PHP研究所、1989年）255ページ。

¹⁷ 石原莞爾「御進講録」角田『石原莞爾資料』8ページ。

¹⁸ 石原『最終戦争論・戦争史大観』21、194ページ。

¹⁹ 石原「欧州古戦史講義」124ページ。

²⁰ 同上、56ページ。

²¹ 石原莞爾「ナポレオンの対英戦争について」角田順編『石原莞爾資料—国防論策—』明治百年叢書（原書房、1967年）322ページ。

ポレオンが高い人気を誇っている理由は何なのか。

そこには2つの要素がある。一つは、フランスの周辺に位置するコルシカ島の下級貴族の子がフランスの皇帝、ヨーロッパの覇者にまで登りつめたこと、そして、もう一つは、成功者として終わらずに、結局、敗者となり、最後は絶海の孤島で囚われの身のまま生涯を閉じたということである²²。すなわち、ナポレオンは立志伝中の不世出の英雄という側面と人生終末の没落という悲劇性を兼ね備えているのである。それがナポレオンの人気の秘密なのであろう。また、こうした要素は、源義経、織田信長、豊臣秀吉といった日本の歴史上の人物で、かつ、軍人（武将）で人気のある人物と、かなりの程度、共通している。

²² 安達正勝「訳者まえがき」ロジェ・デュフレス『ナポレオンの生涯』安達正勝訳（白水社、2004年）3ページ。